
IS～自由と一角獣～

ユニコーン最高

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS ～自由と一角獣～

【Nコード】

N3126T

【作者名】

ユニコーン最高

【あらすじ】

謎の世界から元の世界に戻れると思っていたキラとバナージ。だが、2人が辿り着いたのは《インフィニット・ストラトス》の世界だった

プロローグなんだけれども、無双からはエピソード（前書き）

ガンダム無双3の後の話ですが、ガンダム無双3をやっていない方はキラとバナージと一緒にいたと思って頂いたら良いです。

ガンダム無双がクロスオーバーなのに、さらにインフィニット・ストラトスをクロスさせてみました。

楽しんで頂けたなら幸いです

プロローグなんだけれども、無双からはエピソード

Side?

僕らは謎の世界に飛ばされ騎士ガンダムと闘い、それに勝つ事が出来た。騎士ガンダムが消えた後僕らもそれぞれの世界に戻る事が出来たはずだ……そう、はずだった

何故こういう言い方をするのかと言うと、僕は知らない所にいる。ただ、アリーナってのは分かった。さらに言うならば武装した人達に僕は囲まれていた

とにかく今は大人しくするしかない

『大人しく両手を頭の後ろに組め』

僕はそれに従い、両手を頭の後ろに組んだ。

『貴様はどここの所属の者だ?』

「オーブ連合首長国所属のキラ・ヤマトです」

sideキラ

あれから場所を移動していろんな事を聞かれたが、僕の言っている事が伝わっていない。オーブという国も無い。MSも無い。あるのはIS：インフィニット・ストラトス通称という物らしい。

因みに僕には手錠がかけられていたが、抵抗が無いと分かると外してもらった。外すよう指示したのも今僕の目の前にいて質問してくるこの人……織斑千冬という女性だ。

「本当に何も知らないのか？」

「本当に何も分らないんです」

知らない世界に来るのも2度目ってのも話したんだけど、信用してもらえたのかな……じゃないと僕はどうなるのかな

「そうか：お前は大変なんだな」

え？信じてくれたのかな

「信じてくれるんですか？」

「あまり信じがたい話だが、お前の目を見ていれば嘘を言っているようには思えないからな」

良かった…でも、これからどうしよう

「だが、ISを知らないのは嘘何じゃないのか？」

「何ですか？」

「その首に下げてるのはどう見てもISだろう」

首？…って何かペンダントがある。ストライクフリーダムの羽の形をした小さなペンダントが…そういえばこっちの世界に来るとき乗ってたフリーダムが無くなってたな

「これがIS？」

「分かった…本当にヤマトはこの世界の事を知らないんだな…」

やっぱり信じてなかったの？さっきのは僕を試してたの！？

「ヤマト、お前はこれからどうするんだ？」

「どうするも何も元の世界に戻る方法を探すしか無いです」

「なら手掛かりを掴むと思ってI S学園に入学しないか？」

「I S学園？」

この世界の事を千冬さんから教えてもらったが、女尊男卑らしい。I Sが女性しか扱える事が出来なくて、そこから世界が一変した。戦争が起これと予想が出来ただけど、どうやら当たっていたが、今はスポーツの一環となっているらしい。

「最近になってデカイニュースが出てきてな：また世界を揺るがす事件が起きたんだ」

世界を揺るがす事？

「男性でたった1人だけISを使える人間が現れたんだ」

へえ：：つと言っても僕にはあんまりその大事件さは分からない。

「まあ、ヤマトを数えたら2人になったがな：ってヤマトにはあんまり実感が湧かないか。そんな事よりIS学園に入るか？」

「行く宛も無いので入学します。でも、大丈夫なんですか？」

「大丈夫だ。私に任せろ」

何か千冬さんは頼もしい感じがする。何か困ったらこの人に頼ろう。

「因みに、ISを扱える男性は今年からIS学園に入学して来る私の弟だ。弟をよろしくな」

お：弟！？

プロローグなんだけれども、**無双**からは**エピソード**（後書き）

バナージの登場はまだになります。

ちょっと話が進まないと登場させません。つと言っても2、3話くらい後ですけどね。

クラスメイトは全員女子と思いきや男子がもう1人いた（前書き）

作者は原作ではなく、アニメしか知りません。だから、アニメのよう
うに進めていく予定です。

クラスメイトは全員女子と思いきや男子がもう1人いた

side 一夏

ああ……これは……想像以上にキツイ……

IS学園に入学する事が出来たが、いざ教室の中だと皆こっちを見てる……

「皆さん入学おめでとう。私は副担任の山田 真耶です」

俺は席の真ん中で一番前なんだが分かる……この静けさ、背中に伝わる視線……何でこっちを見るんだよ!?

「え……ああ……今日から皆さんはこのIS学園の生徒です。この学園は全寮制。学校でも放課後も一緒です。仲良く助け合って楽しい3年間にしましょうね……（は……反応が無い……）じ、じゃあ自己紹介をお願いします。えと……出席番号順で……」

うう……箒……って今日を反らしたよね！？何で？それが6年ぶりに再会した幼なじみに対しての態度か？俺嫌われてるんじゃない？

「……むら……ん……」

どうしたら……

「織斑一夏君！」

「は……はい！」

うわぁ……変な声が……笑われてるし

「あのう大声出しちゃってごめんなさい。でも、《あ》から始めて今なんだよね。自己紹介してくれるかな？ダメかな？」

「いや：あの：そんなに謝らなくても：：：」

ここはビシッと自己紹介しないと

「えゝ：織斑一夏です。よろしくお願いします。っ！」

何！？その期待の籠もった眼差しは？

箒！：：：ってまた反らされたし：

いかん：ここで黙ったままだと暗い奴のレッテルを貼られてしまう！

深呼吸深呼吸：：：良し！

「以上です！」

sideキラ

あれから千冬さん：いや、織斑先生と呼ぶべきかな。まあ、織斑先生にいろんな事を教わった。ISの操縦の仕方とか、ISに関する事。学園の中の事などをね

で、それを先程まで勉強してたんだけど、入学式とかまでには間に合わなくて出席出来ず、初めての授業の日に初めての登校だ。

織斑先生と一緒に教室に入ったらいきなり男子生徒を殴った：何故弟をグーで：

「っつ：げ！千冬姉！？がっ！」

もう一発：手厳しいな織斑先生：

「学校では織斑先生だ」

「先生会議はもう終わられたのですか？」

「ああ。つと言うよりも、会議ではなく、ヤマトにいろいろと教えていて遅くなった。クラスの挨拶を押し付けてすまなかったな」

僕は入口に立って見ているけど、皆織斑先生に夢中のようにだ

「諸君！私が担任の織斑千冬だ。君達新人を1年で使いものにするのが仕事だ」

「「きゃー！ー！！！」」

「千冬様よ！本物の千冬様よ！」

「私お姉様に憧れてこの学園に来たんです！」

織斑先生の人気は凄いな：ほぼ全員が先生のファンなんじゃないのかな

「はあ：よくもまあこれだけの馬鹿者が集まるものだ：私のクラスだけに集中させてるのか：」

「お姉様！もっと叱って！罵って！」

「そして時には優しくして！」

「千冬姉がこのクラスの担任に：」

「で、挨拶も満足に出来んのかお前は？」

「いや：千冬姉：俺は：」

「織斑先生だ！」

「はい：織斑先生：」

容赦ないな：織斑先生

「静かに！今日はお前等の新しい仲間を紹介する。ヤマト、自己紹介をしろ」

織斑先生の隣に立って周りを見渡すと、皆目が点になってる：まあ、男子がもう1人ってなるとそりゃあそうなるよね

「キラ・ヤマトです。皆さんとはこれから一緒ですが、どうぞよろしくお願いします」

しばしの静寂が起こって……

「きゃー！！何あの美男子は！？」

「あの笑顔素敵すぎる！」

「こっち向いて！」

あはは：凄いな。織斑先生の弟もびっくりしてるみたい

「静かにせんか！ヤマトはあの空いてる席に座れ」

窓際で1番後ろの席だ。通り際に皆こっちを見てるよ。何かこれはこれで緊張する

「良いか！諸君等にはこれからISの基礎知識を半年で覚えてもらう。その後実習だ。基本動作は半月で体に染み込ませろ。良いか？

良いなら返事をしろ！良くななくても返事をしろ！」

「「はい！」」

休み時間になるといろんなクラスの人達が一夏を見に来ているみたいだ。
(自分も見られているとは知らずに)

「なあ、えっと：キラって呼んで良いか？」

おっと、いつの間にか一夏が目の前にいる事を忘れてた

「うん、良いよ。じゃあ僕も一夏って呼ぶね。同じ男子同士よろし

く」

「ああ、よろしく頼むよ。はあくでも、キラが居てくれて本当に良かったよ」

「さすがにここに男子1人ってのはキツイからね」

「ちょっと良いか？」

誰だろう？ ちょっと仏頂面をしたポニーテールの女子が一夏を呼んでるみたい

「え？」

「行ってきなよ」

「ああ……」

一夏はポニーテールの女子とどこかに行っちゃったけど……一夏が居なくなると寂しいな……

――

授業が始まったんだけどなかなか難しいね。でも、織斑先生から教えて貰っていたから少しは大丈夫だけど

「織斑君何かありますか？」

「え……えっと……」

もしかして一夏は何も分かってないんじゃないか……

「質問があったら何でも聞いて下さいね。私は先生ですから」

「：先生：」

一夏：顔が真っ青だよ

「はい」

笑顔で応える山田先生が可哀想に見えてきた…

「殆ど全部分かりません」

やっぱり…

「え？全部ですか？今の段階で分からないって人はどのくらいいますか…」

一夏以外全員が理解しているみたい

「織斑、入学前の参考書は読んだか？」

「あの分厚いやつですか？」

「そうだ。必読と書いてあっただろう」

「いや：間違えて捨てまぶっ！」

やっぱり織斑先生は容赦が無いね。弟を殴るなんて：

「後で再発行してやるから1週間以内に覚えろ。良いな」

「いや、1週間であの厚さはちよつと…」

「やれと言っている」

「(千冬姉！目が怖いよ目が！)…はい…やります」

自業自得だよ。一夏

授業も終わって今は休み時間だ。一夏がうなだれてるから励ましに行こうかな

「一夏大丈夫？」

「ああ…なんとかな…」

「一夏は勉強しないとね」

「でも、難しいんだよあれ…」

「大丈夫。僕が教えられる範囲なら教えるから」

「本物か？助かるよキラ！」

「ちょっとよろしくて？」

「うん？」

「ああ？」

「まあ！何ですのその返事」

だって唐突だったからつい……。金髪の女子が突然話しかけてきたので、僕達はまともな返事が出来なかった

「私に話しかけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度というものがあるのではないかしら？」

なるほど。これが女尊男卑の社会か：

「悪いな。俺君が誰だか知らないし」

「ごめんね。僕も分からないんだ」

「私を知らない！？セシリア・オルコットを！」

僕はこの世界に来たばかりだからなあ……少しは勉強しないと

「イギリスの代表候補生にして入試主席のこの私を？」

「あつ、質問を良いか？」

「ふん、下々の要求に答えるのも貴族の勤めですわ。よろしくてよ」

プライドが高そうだなオルコットさんは

「代表候補生って：何？」

それ僕も知りたかったんだ。ナイスな質問だよ一夏

「信じられませんわ！男性というのは皆知識に乏しいものなのかしら：常識ですわよ：常識！」

「で、代表候補生って？」

今オルコットさんの目が光った。つとと言うよりも待ってましたって感じだったよね

「国家代表のIS操縦者のその候補生で選出されるエリート的事ですわ。単語を読めば理解出来るでしょう」

国家代表候補生だったら分かりやすかったと僕は思う

「そう。エリートなのですわ。本来ならエリートである私の選ばれた人間とクラスを同じくするだけでも奇跡！幸運なのよ！その現実を理解して頂ける？」

「そうか、それはラッキーだ」

感情が籠もってないよ

「馬鹿にしていますの…」

聞こえによればそう聞こえなくはないよね

「だってお前が幸運って言ったんじゃないか」

まあ、確かに：

「だいたい、何も知らないのによくこの学園に入れましたよね？ 唯一男でISを操縦出来ると聞いて期待外れですわね。そちらの方も同じでしょう」

僕は馬鹿にされても良いけど、一夏をあんまり馬鹿にするのは許せないな：

「あんまり期待されても困るんだが…」

「まあ、でも私は優秀ですからあなたのような人間にも優しくしてあげますわよ。分からない事があれば：まあ、泣いて頼めば教えて差し上げても良くてよ。何せ私は入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

へえ：教官ってそんなに強いんだ：僕は一応織斑先生には勝ったけど：

「俺も倒したぞ。教官」

「はあ？」

「倒したって言うか：いきなり突っ込んで来たのを交わしたら壁にぶつかって動かなくなっただけど：それに分からない事なら大丈夫だよ。キラに聞くから」

火に油を注いだ？オルコットさんがぶるぶると震えてるんだけど

「私だけと聞きましたが…」

「女子ではってオチじゃないのか？」

「夏……」

「あなた！あなたも教官を倒したって言うの！？」

「えーっと落ち着けよ！なあ？」

「これが落ち着いていられますの！？そうよ。あなたはどいうなのよ」

「僕？うーん…その教官って人がどんな人か分からないけど、織斑先生には勝ったよ」

「「はあ！？」」

あつ、チャイムの音だ

「話の続きはまた改めて」

僕も席に戻らないと

side 一夏

授業が終わって放課後。俺とキラは寮に戻っていた。キラとは同室だ。1人部屋は寂しいし、女子と一緒の部屋だといろいろとマズい。だからキラが居てくれて本当に良かった：

「なあキラ、さっき言ってたことだけだよ。千冬姉に勝ったって本当か？」

「うん。本気じゃなかったけど、勝てたよ」

キラって何者だよ！？あの千冬姉に勝つなんてさ！

もしかしてキラって専用機持ちなのか！？

「キラは専用機とか持ってるの？」

「うん、これだよ」

制服の胸元の部分からペンダントを取り出した。青い羽の形だな・

「ストライクフリーダム
僕の専用機だよ」

へえ、何か羨ましいな。専用機

「そういえば今朝のポニーテールの女の子って誰なの？」

ポニーテール？ ああ、箒の事か

「彼女は篠ノ之 箒。俺の幼なじみなんだよ。昔は剣道場で一緒に
さ」

「へえ、くんじゃあ一夏も剣道が出来るんだ」

「少しだけだよ。昔の話さ」

そんな世間話をして、1日を終えた

sideキラ

「これより再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決める。クラス代表者とは、対抗戦だけでなく生徒会の会議や委員会の出席など：まあ、クラス長とを考えてもらって良い。自薦他薦は問わない。誰かいないか？」

クラス代表者ね……まあ、オルコットさん、一夏、僕の誰かになるような気がする：

「はい！私は織斑君を推薦します」

やっぱりね

「え？」

「私もそれが良いです」

「おっ：俺？俺よりキラの方が良いよ。何せ千冬ね：織斑先生に勝ったん」「納得がいきませんわ！そのような選出は認められません！男が代表などクラスの良い恥さらしですわ。このセシリア・オルコットにそのような屈辱を1年間味わえと仰るのですか？だいたいそのような貧弱な男が先生に勝てるなど有り得ませんわ」

貧弱：ねえ……そう見えるのかな僕は

「オルコット。人を見た目で判断するのはいけないぞ。まあ、お前がヤマトと戦ったら数秒と持たないと思うだろうがな」

「いいえ、やってみませんと分かりませんわよ。そのような男などこちらが一瞬でひれ伏して差し上げますわ！」

「無理だな。私だって本気をだしてはいなかったが、ヤマトも本気じゃなかった。それに私が本気を出した所でヤマトには勝てない」

織斑先生自身から告げる言葉に皆は絶句する。でも、買い被りすぎだよ

「先生はこんな男を」「こんなこんなってキラを馬鹿にすんなよ」

「馬鹿にとって：実際は馬鹿なのでしょう。代表候補生も知らない人が」

「そっちこそ見た目だけで判断するだけじゃないか」

僕で喧嘩をしないでよ：

「2人とも落ち着い」「決闘を申し込みますわ」

「おおいぜ。四の五の言うより分かりやすい」

「わざと負けたりしたら私の駒使い：いえ奴隷にしますわよ」

奴隷って：それはないよオルコットさん

「ハンデはどれくらい付ける？」

「あら早速お願いかしら？」

「いや、俺がどれくらいハンデを付けたら良いかなって：」

一夏、それは時代が違うよ。ほら、皆笑ってる。男性が女性より強かったのは昔の話だから

「むしろ私がハンデを付けた方が良いかなって思いますわよ。日本の男子はジョークセンスがあるのですわね。あなたもハンデをつけ

た方が良くって？」

「僕？」

何で僕まで

「ヤマト、お前も決闘をしろ」

はあ：一夏に推薦されてる以上参加するしかないか：

「分かりました」

「その代わり、ハンデを付けてやる」

「ハンデ？」

「ヤマト、接近戦だけで戦え」

接近戦か……

「僕はそれで良いです」

「納得いきませんわ！ ハンデなどいりません！ 私が負ける筈など」
身を持ってヤマトの強さを実感しろ。織斑の後にオルコットはヤマトとやる事になるぞ。それでも良いのか？」

「ふん、私は構いません」

「俺もそれで」

「話は纏まったな。それでは勝負は次の月曜日。第3アリーナで行う。各自準備をしておくように」

いろいろと大変そうだ・・・

クラスメイトは全員女子と思いきや男子がもう1人いた（後書き）

アニメの1話分でした。次は対決になるのかな……まあ、バナージの登場までもうちょっと

3年連続皆勤賞って実際凄いいよね…って本来なら普通の話だけど（前書き）

今回は一夏を鍛える話なんですけど、戦いをする描写って難しいんですよ…

出来る限り伝わるように頑張ります

3年連続皆勤賞って実際凄いいよね…って本来なら普通の話だけど

S i d e キラ

「織斑、お前のISだが準備まで時間がかかるぞ」

「え？」

「予備の機体が無い。だから、学園で専用機を用意するそうだ」

一夏も専用機持ちになるのか。どんなのか楽しみだな

でも、予備の機体が無いのはちょっと痛いかな…：次の月曜日までにISの訓練が出来て、オルコットさんがどんなタイプのISかは分からないけど、いろいろと対処法を考える事が出来たからね…：一夏はどうするんだろう

「それを聞いて安心しましたわ！クラス代表の決定戦、私とあなた達との勝負は見えてますけど、さすがに私が専用機、あなたが訓練機ではフェアではありませんわ。話を察するにあなたも専用機持ちって事ですよね」

代表候補生だからやっぱり頭も回るよね

「そうだよ。フェアな対決は出来るよ」

「へえ、お前も専用機持ちなのか」

「そうですね。このセシリア・オルコットはイギリスの代表候補生。つまり現時点で専用機を持っていますの。世界にISは僅か467機。その中でも専用機を持つ者は全人類60億の中でもエリート中のエリートですわ」

467機ってやっぱり少ない。60億から467人が選ばれるんだ

から宝くじと同じくらい確率が低いなあ……MSのように訓練だけじゃあなんともならないのが凄いなあ

ISのコアって技術は一切開示されてない。現在ISの数は467機のコアは篠ノ之東という博士が発明……ん？

篠ノ之……どっかで……

「あの：先生、篠ノ之さんってもしかして篠ノ之博士の関係者なんでしょうか？」

「そうだ。篠ノ之はあいつの妹だ」

あっなるほど。だから名字が一緒なのか

「嘘っ？お姉さんなの？」

「篠ノ之博士って今行方不明で世界中の国や企業が探してるんでし

よう」

「どこにいるか分からないの？」

皆聞きたい事ってたくさんあるよね。でも、篠ノ之さんがここにいてるって事は……

「あの人は関係無い！私はある人じゃない。教えられる事はなにも無い」

篠ノ之さんも行方が分からないのは分かってたけど、姉妹で何かあったのかな？

篠ノ之さんが怒鳴ったから教室が静まり返ったけど

「山田先生、授業を……」

授業も終わって昼休み。皆それぞれ食堂に行ったり弁当を持ってくる人は食べている人もいる

「箒」

一夏は篠ノ之さんを食事に誘うのかな？名前を呼んでも無視してる

「篠ノ之さん」

今度は名字で呼んでるけど、反応が無い。どうしたのかな

「飯を食いに行こうぜ。キラも行かないか？」

「うん、行こう」

「よっしゃ。他に皆も行かないか？」

「はい！はいはい！」

「行くよ！ちょっと待って」

「お弁当作って来てるけど、行きます」

一夏は人気があるなあ

「やっぱりクラスメイト同士仲良くしたいもんな。な、そう思うだろ」

「私はいい…」

「まあ、そう言うなって。ほら立て立て」

一夏が篠ノ之さんの手を取って席から立たせてるけど、篠ノ之さんは何か嫌そうな：

「何だ？歩きたくないのか？おんぶしてやろうか」

「っ！離せ！」

篠ノ之さんが一夏を思いっきり押して一夏が尻餅を着いた。今のは痛そうだ。ちよっと空気が：

「いてて：腕を上げたな」

「ふ：ふん。お前が弱くなったのでは無いか？こんな物は剣術のおまけだ」

「えっと…」

「私達…」

「え…遠慮しておくね…」

「ああゝあ…」

まあ、一夏は篠ノ之さんに何かしたいのかな…

「ほら、行くよ」

僕が篠ノ之さんの手を取って食堂へと向かおうとするが、篠ノ之さんは振り払おうとする。でも離さない

「ち、ちょっと」

「一夏も」

「お、おう」

sideキラ

篠ノ之さんを食堂に連れて来れたんだけど：一夏は篠ノ之さんに気を使ってるのかな

「あんなにむきになる事無いだろう。せっかく気を使ってやってるのに」

「誰がそんな事を頼んだ：」

「もし頼まれたって普通はしないぞ。筭だからしてるんだぞ」

「な：何だそれ」

「おばさん達には世話になったし、幼なじみなんだからこれ位のお節介はやらせろ」

「あ：その・・・ありがとう」

篠ノ之さんは素直じゃないんだね。

っと日替わりランチが出て来た。それを持って僕等はテーブルに着いた

「なあ：箒：」

「何だ」

「ISの事を教えてくれないか？このままじゃ何も出来ずにセシ

リアに負けそうだ」

「くだらない挑発に乗るからだ」

まあ、挑発に乗りやすいのかなあ：一夏は：

「僕からもお願い出来ない？篠ノ之さんも一夏には負けてもらいたくはないでしょう？」

「知らん」

案外冷たい反応だなあ：僕何かしたかな？

「そこをなんとか：頼む！」

黙々と昼食を食べ続ける篠ノ之さん。どうしたものか：一夏には僕

が協力出来る限り協力するけど：やっぱり僕や一夏よりISに詳しい篠ノ之さんに協力してもらった方がよっぽど効率が良いよ

「ねえ、君達って噂の子でしよう？」

上級生の子：なのかな？

「代表候補生と勝負するって聞いたけど……でも君達、素人だよね？私が教えてあげようか？ISについて」

それは好都「結構です」合：ってあれ？

「私が教えてあげる事になっていますので」

「あなたも1年でしょう？私3年生。私の方が上手く教えられると思うけどなあ」

「私は：篠ノ之東の妹ですから：」

「うっ…」

お姉さんを武器につて…：上級生の子も篠ノ之東の名前を出されたら引かざるをえないよねえ

「ですので結構です」

「そっ：そう、それなら仕方ありませんね」

上級生の子は悔しそうにどこかに行っちゃった。さっきより目が鋭くなってるよ篠ノ之さん

「教えて…：くれるのか？」

「覚悟してもらおうぞ。お前も」

僕も？

バシバシつと竹刀のぶつかる音が響合い一夏の竹刀が弾け飛ばされて無防備になった所を篠ノ之さんがとどめをさした

「いって……はあ……はあ……」

僕等はあるから剣道場に場所を移して剣道をやっている。つと言っても僕は袴とか着たことが無いから一夏に教えてもらって着ている

篠ノ之さんは強いなあ

「どういう事だ！」

「いや…どうって言われても…」

「どうしてこうも弱くなっている！？中学には何部に所属していた！」

「帰宅部！3年連続皆勤賞だ！」

凄いけど、今は自慢出来る時じゃないよ

「鍛え直す！IS以前の問題だ。これから毎日放課後3時間私が稽古をつけてやる！」

良い特訓になりそうだね一夏

「ちょっと待て！俺はISの事を…」

「だからそれ以前の問題だと言っている！次！」

僕の番か…

「篠ノ之さん、一夏、防具の付け方を教えてもらえない？」

そんな目で見ないでよ篠ノ之さん

一夏に防具の付け方を教えてもらったけど、胴とか付けてるから動き難いな…面を付けたら視界が悪い

慣れたら大丈夫とは言ってたけど、僕は初心者だよ

「それでは始めるぞ」

中段の構えを取って、始める

一気に篠ノ之さんが攻めに来て、あらゆる攻撃を仕掛けてくるけど、僕は防ぐので精一杯だ。それに小手で竹刀も掴みにくいよ

小手を狙って来ると竹刀で弾き、面だとそれも同じく防ぐ。

そんな事を繰り返して何分経っただろうか

「ちょっと待って。防具を外して良い？」

「はあ：はあ：何でだ？：はあ：」

「慣れないから思うように動けないんだ」

「それはISも同じだ。慣れるから思うように動けるんだ」

それもそうだけど：

「良いんじゃないか？キラにはキラの戦い方があると思うから」

「はあ：分かった：無防備だからと言って：容赦はしないからな。
外して良いぞ」

良かった。僕は一夏に手伝ってもらって、防具を全部外した

「（おいおい：息が上がって無いぞ！？キラはいったいどういう鍛え方をしてるんだ？）」

「（こいつ：息が・・・私は乱れてるのに：落ち着け：落ち着くんのだ）」

」

さて……

「二夏の竹刀も貸してくれない？」

フリーダムに乗ってた時も両手を使って戦ってたからやっぱりこっちの方がしっくり来るよ

下段になるのかな？この構えは

「（二刀流だと？しかもそんな構え方でどうするんだ）では始めるぞ！」

また同じく篠ノ之さんが攻めて来るけど、今度は僕が攻めるからね

竹刀と竹刀がぶつかり合って鏢迫り合いになってお互いに距離を取るように離れる

良し：行くよ

右の小手を狙うように左手の竹刀を振るう。でも、それは防がれる。

距離が縮まってるから右手の竹刀を逆手に持って今度竹刀を弾く。
すると、篠ノ之さんの手から竹刀が離れた

「なっ!？」

「これで終わりだよ」

右手の竹刀を逆手から持ち直して、十字に切るように面と胴を打った

「おお：凄いなキラ！」

「凄くは無いよ。僕がやってるのは剣道じゃないからね」

篠ノ之さんは大丈夫かな？固まったままだけど

篠ノ之さんは面を取ると一夏に詰め寄った

「一夏！何なんだこいつは？」

「落ち着けよ箒！」

そういえばお互いに自己紹介をしてなかったね

「一応自己紹介は1度やったけど：僕はキラ・ヤマト。よろしくね
篠ノ之さん」

「篠ノ之箒だ：」

睨みつけてないでくれないかな：って僕嫌われた？

「一夏：キラにISの事を教えてもらえば良いんじゃないか？」

「それは無理だよ。僕はISの事をあんまり知らないんだ。一夏以下だよ」

「そんな訳が無いだろう。その強さもありながらこのIS学園にも入学している。私よりよっぽど効率的だろう：：」

そんなに残念そうに言うけど、篠ノ之さんが一夏に教えたいのかな：篠ノ之さんってまさか一夏の事を？っとその前に一夏にもちゃんと言った方が良いよね

「ねえ、篠ノ之さん、一夏」

「何？」

「何だ？」

「僕は別世界から来た人間なんだよ」

「お前は私達を馬鹿にしてるのか？」

やっぱり信用出来る話じゃないよね……

「僕は2人を信じて話すからちゃんと聞いて欲しい。僕は本当にI Sの事をあんまり知らない。それにこの世界に来たのもつい最近なんだ」

一夏は聞いてくれてるけど、篠ノ之さんは不機嫌そうだ

それから織斑先生が僕の事を知っている事、僕のいた世界の事、別世界に來たのは2度目だって事も全て話した。

そしたら篠ノ之さんも少しは信用してくれたみたい

証拠らしい証拠は無いとかもしれないけど、あるとすれば確実に僕の存在とストライクフリーダムだ。フリーダムはMSではなくISになっているけど、このISは織斑先生達以外知らない機体だ

あれから僕と篠ノ之さんで一夏を鍛えたんだけど、篠ノ之さんはISについて全く教えてない。やったのは一夏を鍛えただけだ。だから僕が知っている限りISの事を一夏に教えた……ってこの世界の人間じゃないのにISの事を一夏に教えるって不思議な話だよね

時はあっという間に過ぎて、戦いの日だ

さあ、どうなることやら

3年連続皆勤賞って実際凄いいよね…って本来なら普通の話だけど(後書き)

次はVSセシリアの話

アニメで言うところの第2話の後編になります

バナージはもうすぐ

クラス代表決定戦と新たな来訪者

sideキラ

僕等の教えられる範囲で教えたんだけど、やっぱり一夏が心配だ

「あれがあいつの専用機か…」

僕等がいるのはアリーナの控え室でモニターに映し出されているのはセシリアとそのIS

「見た限りじゃあ遠距離戦かもしれないな…：：：接近戦もあり得るかもしれないからそこは気をつけてね」

「分かった」

一夏自信は大丈夫そうだけど、篠ノ之からすれば不安なようだ。それは表情からして分かる

「一夏のISがどんな物かも分からないのだから作成が組めない」

「でも、僕と篠ノ之でやれるだけやったから後は一夏次第だ」

『織斑君！来ました。織斑の専用IS！』

『織斑、それとヤマト、すぐに準備しろ。アリーナが使用出来る時間は限られている。織斑はぶっつけ本番で物にしろ』

シャッターが開いて一夏専用機となるISが現れた

『これが織斑君の専用IS 《白式》です』

名前の通り全身が白い。武装は……どうなんだろう……

山田先生や織斑先生の言われた通り、僕らはISスーツに着替えた。

『織斑、すぐに装着しろ。フォーマットとフィッティングは時間が無いから実戦でやれ』

初期設定と最適化は実戦中にか……まあ、訓練機と同じで、専用機としての能力が発揮出来ない。初期設定と最適化が完了して初めて第一形態になる。僕のフリーダムはどちらも終わってたから良いんだけど、一夏は実戦中だから難しいかも

「あれ？」

一夏が白式に触れて何か感じ取ったみたい。どうしたのかな

「どうした？」

「初めてISを触った時と…感じが違う」

「大丈夫かい？」

「ああ、大丈夫だ。馴染む…理解出来る。これが何なのか…何の為にあるのか…」

やっぱり一夏の為に作られた専用機だね。一夏は白式を感じ取れたみたい。白式に背中を預けるように乗り、装着された

『セシリアさんの機体は《ブルー・ティアーズ》遠距離型射撃の機体です』

やはり遠距離型か：でも、接近戦の装備があると警戒してた方が良いかもね。

『ISには絶対防御という機能があつて、どんな攻撃を受けても最低限操縦者の命は守られるようになっていきます。ただその場合、シールドエネルギーは極端に消耗します。分かってますよね』

一夏がカタパルトに乗って出撃準備にかかった

「箒、キラ」

「な、何だ？」

「何？」

「行ってくる」

「ああ」

「行ってらっしゃい」

篠ノ之はもうちょっと声をかけてあげたら良いのに。一夏の初出撃だからもっと応援してあげないと

カタパルトから射出されて、戦いの舞台に出た

頑張れ一夏

sideOUT

キラと箒に見送ってもらって一夏はアリーナの中……セシリアと対決の時だ

「最後のチャンスをあげますわよ」

「最後のチャンスって？」

「私が一方的な勝利を得るのは当たり前。今ここで謝ると言うのなら許してあげても良くてよ」

「（冗談じゃない！戦うからには正々堂々戦ってやるさ！）そういうのはチャンスとは言わないな」

「そう：残念ですわ。それなら：お別れですわね！」

セシリアが先制攻撃仕掛け、スターライトmk？からレーザーを放つ。レーザーが速すぎて一夏は回避行動に移れなくてガードをするしか出来ない

「ぐっ……うわぁ！！」

そのまま地面に叩き付けられそうになるがなんとか耐えて、体制を

立て直すがセシリアが一方的に攻撃を仕掛け一夏は回避するしかない

だがギリギリで何発も回避するが、シールドエネルギーが削られて
いる

「（くそっ！俺が白式の反応速度に追い付けてない！）」

「さあ！踊りなさい！私とブルー・ティアーズの奏でるワルツで！」

一夏で遊ぶように撃ちまくる。一夏はそれに従うしか出来なく回避
で精一杯だ

「（装備：装備は：）白式のデータで確認して：ってこれだけ！？
近接ブレード1つしか無い：でも、素手でやるよりかは良いか！」

一夏は近接ブレードを構えてセシリアに攻撃を始めた

「遠距離型の私に近距離格闘装備で挑もうだなんて、笑止ですわ！」

ギリギリではあるがシールドエネルギーが少しずつ削られている一夏はだんだんと焦ってきている

空高くにいるセシリアに接近がなかなか出来ないが、少しずつ距離を縮めている。これなら行けると接近戦に持ち込もうとするが：

「そろそろファイナーレと行きましょう」

「そんなのありかよ!？」

セシリアのISから4つのレーザー・ビットが向かって来る。今までセシリアからの攻撃を避けていたが、5方向からの攻撃になると思ったが、セシリアからの攻撃が来ない

「左足：頂きますわ！」

セシリアがそう言った途端にレーザー・ビットは全部ブルー・ティ
アーズに戻っていった。そしてスターライトmk?を構えて撃つ

「（もしかしたら俺の考えが正しければ……良し!）一か八か!」

近接ブレードでレーザーを弾いて一旦セシリアから距離を取って一
気に接近を仕掛けた

レーザー・ビットから撃ってくるレーザーでシールドエネルギーが
削られるが、接近戦に持ち込める距離になった

「うおおお!!」

近接ブレードで斬りつけようとするが、回避されまた距離を取られた

「くっ：避けられたか：」

「無茶苦茶しますわね！けれど無駄な足掻きですわ！」

またも4つのレーザー・ビットが接近して来た。だが、一夏も回避するだけの馬鹿ではない。動きを見計らってレーザー・ビットを斬りつけて破壊した

「分かったぜ。この兵器は毎回お前が命令を下さないと動かない。しかもその時、お前はそれ以外の攻撃は出来ない。制御に意識を集中してるからだ。そうだろう」

得意気にレーザー・ビットの特徴を説明する一夏。当たってはいるが、少々浮かれている様子

「残り3機！距離を詰めればこっちが有利だ！」

レーザー・ビットを2つも破壊して、一夏の攻撃出来る間合いに入
ったが：

「掛かりましたね」

「えっ!？」

「4機だけではありませんのよ!」

セシリアの腹部にあるミサイルビットが一夏に狙いを定めた

「しまった!」

ミサイルを2発発射し、一夏は回避を試みるが、ミサイルをセシリ
アの意識で誘導され、ある意味ホーミングミサイルだ

「(避けきれない!……)」

直撃し大爆発が起きた

セシリアは勝ったと確信した。だが、現実はそうでは無く、煙が晴れると姿を変えた『白式』と一夏の姿があった

「まさか：ファーストシフト！あ：あなた今まで初期設定の機体で戦ってたと言うの！？」

セシリアの言うとおり、一夏は今まで初期設定だけで戦っていた。だが、たった今フォーマットとフィッティングが完了し、ファーストシフトに形を変えたのだ

「よく分からないが、これでやっとこの機体は俺専用の機体になったらしいな」

モニター画面には近接特化ブレード『雪片式型』の文字が表示され

使用可能となった

「《雪片式型》：雪片って千冬姉が使ってた武器だよな：俺は世界で最高の姉さんを持ったよ。でも、そろそろ守られるだけの関係は終わりにしなくちゃな。これからは俺も、俺の家族を守る」

雪片式型を展開させ、これで先程より戦いやすくなると一夏は確信した

「もう面倒ですわ！」

大量にミサイルを撃って来た。だが、ファーストシフトが完了した《白式》ではミサイルの動きを捉える事は簡単だ。ミサイルを全て切り落とし、セシリアに接近し、再び一夏の間合いに入った

「行ける！はあああ！！！」

「うっ…！」

セシリアがヤバいと思い、同時に一夏が勝てたと思った時だった

突如ブザーが鳴り響いた

『勝者セシリア・オルコット』

sideキラ

『勝者セシリア・オルコット』

どうして？今の一撃が当たれば一夏が勝ってたじゃない

「どうして負けたのかな？」

「一夏のシールドエネルギーが0になっている」

あつ、本当だ。いつの間にかシールドエネルギーが0になっていた。
でもどうして：

「どうして0になったの？」

「私にも分からない」

皆哑然としていて、何が起きているのか分からない。それは僕も
同じだ

ん？空から何かが…

「一夏！オルコットさん！空を見て！」

『どうしたんだキラ？』

「良いから早く！」

モニターでしか見てないから分からないけど何かがこのアリーナに向かってる……っと言うよりも降ってきている

「どうした？キラ！」

篠ノ之も見えて無いのかもしれない。僕は見える所までやって来た。やっぱり早い

あっという間に地面に落ちてきた。あれは：《ユニコーンガンダム》！？って事はバナージ！

side バナージ

ここがどこか分らない。周りを見渡すとどうやらアリーナのように。人がいるけど、見た事の無い制服を来た女子が何人かいる

何だ？ 空には分らない機体：：モビルスーツでもなく、パイロットスーツでもない：何だあの2人は？ 俺は：：ユニコーンガンダムが無い！ っと言うよりもユニコーンガンダムと俺が合体してる感じになってる。どういう事なんだ！？

side OUT

全員が全員今起こっている事を整理して、先に動いたのはセシリアだった

「何なんですのあなた！」

スターライトでバナージに狙いを定めた

バナージは撃たれると思い回避行動を取るように動き出した

「そっちこそ何なんだ!？」

セシリアがレーザーを撃ってダメージを与えようとするが、それをバナージはシールドで防いだ

「オルコットさん! そいつと戦っては駄目だ!」

キラの叫びはセシリアに届かなく、ミサイルを放つなど攻撃を仕掛けた

「くそっ!」

ビームマグナムを構えてセシリアに狙いを定めた

あれを受けたらマズい！そう思い、キラは《ストライクフリーダム》を展開させ、セシリアに急接近した

「間に合え！」

ビームマグナムが発射されるが間一髪セシリアの手を引いて助け出す事が出来た

「っ：あなた！邪魔をしないで！」

1機しかないレーザー・ビットをバナージに向かわせ攻撃をしようとした

「バナージにその攻撃は駄目だ！」

「えっ？」

キラの注意の通り、バナージはレーザー・ビットの制御を乗っ取って自分の兵器にして逆に攻撃を開始した。

「私のレーザー・ビットが！？」

「くっ：やめるんだバナージ！」

ビームサーベルでレーザー・ビットを破壊しバナージに急接近し、バナージは見覚えのあるように見覚えの無い何かが来る：つまり敵だと思い込んでビームトンファアを展開させた

ビームトンファアとビームサーベルがぶつかり合って鏖迫り合いになった時、お互いの顔をちゃんと確認出来た。

「僕だよバナージ！キラ・ヤマトだ！」

「……！キラさん！」

キラだと分かった、ビームトンファアを閉じた。お互いに地面に降りた

「キラさんここはどこなんですか？」

「落ち着いて聞いて。僕達はまた知らない世界にいるみたいなんだ」

「知らない世界？また騎士ガンダムで何か……」

「それは分からない。でも、ここではMSは無いみたい。でも、バナージのユニコーン。僕のストライクフリーダムはこの世界で言われるISになったみたい」

バナージは何がなんだか分かってない

「IS？」

「うん。まだ知りたい事はたくさんあるよね。でも後にしてほしいんだ。今は皆に説明しないと」

キラの事情をよく知っているのは千冬にだ。あと一夏に箒

side バナージ

あれからいろんな説明をキラさんに聞いた。だが、俺には信じられない事ばかりだ。だけど、これは現実なんだ。受け止めないと……その後、キラさんが織斑千冬という女性を紹介してくれて、俺も自己紹介をした時、織斑さんは目が点になっていた。

キラさんが俺の事を織斑さんに説明をしてくれて話がとんとん拍子に進んで、俺はIS学園と言うところに入学する事になった

「この学園に転入する事になったバナージ・リンクスです。よろしくお願いします」

入ってきた時には女子全員がいろんな事を言っていたが、自己紹介をすると驚くように静かになった。何でだ？

クラス代表決定戦と新たな来訪者（後書き）

千冬や皆が驚いていた事は一夏とバナージは声優が一緒だから、一夏とバナージの声が同じなんです。

だから、一夏が喋っているのかと思いきやバナージが喋っているのです。でも、多少は声は違います。ほんの少しだけ……

ファンネル系統の物は全部統一させます。ややこしいので、だからバナージはそれらの物を操れます。もちろんストライクフリーダムのドラグーンも

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3126t/>

IS～自由と一角獣～

2011年10月9日23時17分発行